

「風が強いな」。真夏のポルトガルの海は、慣れ親しんだ江の島の海に似ていた。江の島は神奈川・葉山町の中大ヨット部合宿所から近く、「ホームシー」といえる海だ。

ヨットは帆(セール)に風を受けて揚力が生まれる。強風でハイクアウトをかなり頑張らないと艇は横倒しにされてしまう。1カ月前の「江の島スナイプ」(ノースセールカップ東日本スナイプ級ヨット選手権大会)で、相模湾沖の南から寄せてくる強風と大波に、しっかりと対応できた経験が2人の自信になっていた。

※ハイクアウト＝帆が強風で横倒しにならないように、傾きと反対側の方向にヨットの縁から身体を乗り出し、艇の平衡を保つ動作。太ももや腹、背中に負担がかかり、それぞれ筋力を求められる。

ヨット部 廣瀬翔大選手(法4) 熊倉優選手(理工3)

勇躍、 ポルトガルの海へ

スナイプ級世界選手権に出場





2022 SNIPE WORLDS. CNC, CASCAIS, PORTUGAL / © MATIAS CAPIZZANO

ヨット部の廣瀬翔大選手(法4)、熊倉優選手(理工3)のチームが、2022年8月18~25日にポルトガルで開催された「2022 SNIPE CLASSWORLD CHAMPIONSHIP」(スナイプ級世界選手権)に出場した。参加87艇中の34位と目標の10位には届かなかったものの、世界の舞台での経験はヨットマン2人にとって未来への大きな糧となった。 **学生記者 芳賀葵(法3)、白井美有(国際経営2)**

首都リスボンの西十数キロに位置するリゾート地、カスカイス市のマリーナ沖がスナイプ級世界選手権の舞台。ももとは日本開催のはずだったが、コロナ禍により開催地が変更された。廣瀬選手と熊倉選手のチームは2021年12月に葉山沖で開催された「第74回全日本スナイプ級ヨット選手権大会」で20位に入り、コロナ禍や海外での開催などを理由に上位チームに辞退が重なって、世界選手権の出場枠を獲得した。

風を読む能力、 ハイクアウトの力 世界の舞台で試す

「大舞台でどれくらい力が通用するかを試したい。トップクラスの選手たちからスキル(技術)を盗み取りたい」(熊倉選手)と果敢にチャレンジした。中学時代からヨット経験のある廣瀬選手は「まずは大会を楽しむ。そして、大学に入って自分自身がどれだけ成長したかを知りたかった。ベストは尽くせし、また世界の舞台に立ちたい思いが強く

なった」と振り返る。

強風の中で、よりスピードを競う過酷な「サバイバルコンディション」(廣瀬選手)の下でのレースとなり、ヨットマンに求められる風を読む力と、しっかりとしたハイクアウトを可能にする体力・筋力の強さを試された。2人にとって、目標のインカレ団体戦(11月)につながる経験を得るという意味合いも大きかった。

陸に上がったセーラーたちが交流するパーティーに参加し、本場のレセプション文化も味わうことができた。学生や日本国内で経験した

ことのない機会であり、もてなしだったという。

クラウドファンディングで 渡航費など調達

渡航費や艇の手配料、高額なセール購入費などは、自分たちだけでまかない切れなため、原資の一部をクラウドファンディングに求

めた。2022年6月からの約2カ月間で、目標額90万円を上回る91万円の資金が支援者50人から集まった。2人は「学生の挑戦に対する応援という意味が強い支援だったと理解しています。本当に感謝しています」と話す。

ヨットの魅力を尋ねると、廣瀬選手は「ヨットは生活の一部。ヨットのない自分を考えるのが怖い。海と

いうフィールドでの練習を通して、ほかの大学の選手とも交流し、つながりが生まれている。自分を成長させてくれているのがヨット」と語り、熊倉選手は「普段の努力が“見える化”できる場所」と答えた。

「ヨットは生涯スポーツであり、社会人になっても続けたい」と廣瀬選手。海の男たちの挑戦に終わりはない。



リゾート地、カスカイスの海辺の風景▲

☆ヨット(セーリング)競技

大学生の競技は、スナイブ級、470(よんななまる)級で競われる。帆(セール)の数がスナイブ級は2枚、470級は3枚で異なる。470級は艇の全長470センチから名づけられた。ともに2人乗りで、海面に浮かべたブイ(マーク)を決められた順序、決められた回数で回り、走破順を競う。ほかの艇との戦いであるとともに、波の高低や潮の流れ、風の強弱など自然との闘いでもある。東京五輪ではウインドサーフィンなども含めて10種目が実施された。



2022 SNIPE WORLDS, CNC, CASCAIS, PORTUGAL / © MATIAS CAPOZZANO

廣瀬翔大選手

ひろせ・しょうた。神奈川・逗子開成高卒、法学部4年。海という自然を相手にするヨット部のチームリーダーとして、普段の練習から安全を最優先した判断をするよう常に心がけている。スナイブ級世界選手権では、艇の後方に乗り、帆を調整しながら舵を取るヘルムスマン(舵取り役)を務めた。

熊倉優選手

くまくら・すぐる。千葉・千葉敬愛高卒、理工学部3年。中学校の6年間、柔道に打ち込んだが、自然を間近に感じられる競技に魅力を感じ、大学入学後にヨットの世界へ。スナイブ級世界選手権では、艇の前方に乗ってバランスを取る役割のクルー(船員)を務めた。

初志貫徹 「決めたらやり切れ」 ヨット部のミーティングにはトム・クルーズ風の格好で?!

ヨット部の廣瀬翔大選手、熊倉優選手の2人の取材で楽しい時間を過ごせました。まじめな人柄の熊倉選手と、明るくて周りを笑顔にしてくれる廣瀬選手。ヨットの知識が乏しい私にも、分かりやすい言葉で、目を見て話してくれたことが印象に残っています。

熊倉選手は、私と同じ2020年に中央大学に入学しました。ちょうどコロナ禍で、私自身は課外活動をしていなかったのですが、熊倉選手はヨット部に入部。当初から「世界選手権に出る」という明確な目標を立て、今回のスナイブ級世界選手権出場で「有言実行」を果たしました。尊敬に値する実行力です。

また、「決めたらやり切れ」という両親の教えについて何度も言及し、熊倉選手が本当に大切にしている言葉なのだと感じました。「もう一度世界を目指したい」という目標が果たせるよう、私も応援しています。

学生記者 芳賀 葵 (法3)

廣瀬選手は、ヨット部のミーティングなどの際、映画「トップガン」の俳優、トム・クルーズのようないで立ちで現れるなど、部員の雰囲気を和ませるパフォーマンスも行うそうです。チームリーダーとして周囲をよく観察しているところは、見習おうと思います。取材時も一瞬にして私たち学生記者を笑顔にしてくれ、積極的に話しかけてくれたことで、取材はスムーズに進みました。持ち前の明るさで部員からも慕われる先輩なのだろうと感じました。

取材を通して、廣瀬選手、熊倉選手の2人ともヨットが何よりも好きだということが伝わってきました。「ヨットなしの生活は考えられない」と話した2人の充実した表情。とてもまぶしく映りました。

「やる気を注入してくれる存在」「ヨットの師匠」 互いに刺激し合い成長する2人

「尊敬する人はいますか」という質問に対する廣瀬翔大選手の答えは意外なものだった。「僕は全員尊敬しています。この質問をされたとき、ぱっと一人が浮かぶことはよくないと思っていて…。詳しく聞くと、とても深い考えに裏打ちされたものだった。

廣瀬選手は次のように説明してくれた。誰しも尊敬している人物はいるだろうが、その人物のすべてを正しいと考え、神格化すべきではない。すべてにおいて正しい人物がないように、すべてにおいて間違っている人物もない。誰にも正しい、尊敬すべきところがあり、そこを見るべきだという意味だった。こうした考えを言語化できるほどに自分のものになっていることに驚いた。この考えはスポーツに限らず、廣瀬選手の学生生活や就職活動にも生かされているのだろう。

熊倉優選手は、少なくない同期のヨットマンが世界の舞台を経験しており、世界選手権出場という高い目標を掲げるきっかけになったと話した。初志貫徹する意志の強さが、ヨット部への入部を反対していた両親を説得し、仲間たちと一緒に部活動の充実に向けて力を尽くすことに結び付いているのだと感じた。「もっと強くなって、もう一度世界の舞台へ」と言葉に力を込めた熊倉選手の目は輝いていた。

学生記者 白井美有 (国際経営2)

2人は互いに刺激し合いながら成長している。廣瀬選手は「自分がたるみそうになったとき、やる気を注入してくれる存在。ヨットへの情熱を思い出させてくれる」と熊倉選手をたどれば、熊倉選手は「ヨットの師匠が、部活動への熱意が人一倍ある廣瀬さんでよかった」と1学年上の先輩に感謝する。

「ヨットの沼にはまってしまいました」と笑う2人の顔が印象的だった。沼とは、もちろん、ヨットの魅力であり、奥深さだろう。この記事を書きかけにヨットの魅力に気づく人が増えたら何よりうれしい。



(左手前から時計回りに)

熊倉優選手、廣瀬翔大選手、学生記者の白井美有さん、芳賀葵さん▲

「波と呼吸を合わせる」「反復練習」 春季全日本学生サー



▲第51回春季全日本学生選手権で優勝した鈴木うるる選手©Hina

鈴木うるる選手(国際経営4)

国際経営学部4年の鈴木うるる選手が、サーフィンの第51回春季全日本学生選手権大会(2022年6月11~12日、千葉県南房総市の千倉海岸)で優勝した。4人のジャッジ(審判)が満点を出す「パーフェクト10」を獲得する堂々の勝利だった。「大会ではいつも優勝が目標。落ち着いて波に乗り、楽しめたことが大きかった」と勝因を振り返っている。

学生記者 奥田陽太(経済2)

のできない“一期一会”のスポーツ」 フィン選手権で優勝

圧巻のパフォーマンス 「パーフェクト10」

「久々の優勝で素直にうれしかった」。小柄な体で声を弾ませた。2021年の秋季全日本学生選手権は3位に終わったが、今回は「絶対に優勝する」と決めて挑んだ。最大8本のパフォーマンスのうち、1本のパフォーマンスでジャッジ4人全員が10点満点を出す「パーフェクト10」が出た。圧巻の優勝だった。喜びは会場に応援に駆

け付けた母の香奈子さん、弟の瑛斗さんに真っ先に伝えた。元プロサーファーの父、善司さんにもSNSで報告した。瑛斗さんもサーフィンに打ち込む「サーフィン一家」が歓喜に包まれた一日だった。

大会出場には、個人として、中央大学の選手としての両方の機会があるが、有名な大学の選手として、中大生として恥ずかしくないように行動することを心掛けている。今大会でも自主的にビーチクリーン(海岸清掃)の活動を行ったという。

お気に入りの海 九十九里 「サンライズ・ポイント」

「これといった得意技はありません」と話す鈴木選手のサーフィンの特長は「波に合わせたサーフィン」。得意技がないのが得意技といったところだろうか。波と呼吸を合わせるように、フロー(流れ)を大切にしていたパフォーマンスをする。刻々と変化する波に対応する臨機応変さも肝心。事前に決めた通りのパフォー

春季全日本学生選手権の優勝トロフィーを掲げる鈴木うるる選手(左は母の香奈子さん、右は弟の瑛斗さん) ©Toshizou ▼





▲サーフボードを手に笑顔の鈴木うるる選手©Fumimax



▲海に感謝©Zen-Z

マンスをできないこともあるが、技を成功させたときの喜びはひとしおだ。

好きな海は、地元千葉の九十九里浜沖にある幅500メートルほどの「サンライズ・ポイント」。「いい波が来る」とたとえるこの場所に週2回は練習に訪れる。大会で最高のパフォーマンスを披露するため練習は欠かさない。雪が降る真冬でも海に入るという。

魅力多きスポーツ

サーフィンは、円を描くようにえぐられた波にボードと身体を包まれたり、白波を立てる波にボードを乗せたりしながら、いかにスリリングなパフォーマンスを披露できるかを競う。自然相手と同じ波は二度と来ない。鈴木選手は、反復練習のできない“一期一会”な競技であるところに魅力と奥深さを感じているという。決められたパフォーマンスの時

間内に、いい波が来るかどうか、運に勝負が左右される面もある。選ぶ波や観客の歓声の大小、審判個々によっても採点は微妙に異なる。それも奥深さの一つだ。

また、サーフィンという競技にはさまざまなバックグラウンドを持つ人が集まっているという。「私は自由で多様性がないと心地いいと思えない人間なんです」と語る鈴木選手にとって、サーフィンの世界はピッタリとマッチしているのかもしれない。



鈴木うるる選手

千葉・木更津高卒、国際経営学部4年。身長145センチ。小学6年でサーフィンを始めた。サーフィンを通して海外や英語に興味を持ち、「英語を学ぶだけでなく、英語で何かを学びたい」と国際経営学部に進学した。ライバルは自分自身。普段から「きのうの自分に勝とう」と考えているという。中大に「サーフィン部」はないが、2021年の秋季全日本学生選手権では3位入賞し、計32競技大会の順位に応じて付与されたポイントで大学日本一を競う同年の「UNIVAS CUP」での中大の上位入賞（関東10位、全国12位）に貢献した。

在籍する国際経営学部もさまざまな個性の学生が集まっているという点で居心地がいいという。

サーフィンとこれから

鈴木選手は2022年7月にプロへの公認テストを受験した。惜しくもパスできなかったが、サーフンは五輪の実施競技となり、さらに高みを目指すこともできる。

「来年またプロテストを目指しますか」と尋ねた私に、鈴木選手は「応援してくれる人のために頑張っ

ていて、人と争うことは好きではないんです」と答え、さらに「サーフンは自分を自分として保つ一つの大事な要素。応援してくれる家族や仲間のため、また自分自身と闘う楽しさを感じるために、プロを目指すことを含めて、大切なものとして続けていきたい」と力を込めた。卒業後は一般企業に就職するという。

尊敬しているのは、企業経営者であり努力家の祖母の計代さん、やりたいことをいつも応援してくれる母の香奈子さん、サーフンをコーチしてくれた父の善司さんの

家族3人。好きな言葉の「実るほど頭を垂れる稲穂かな」も計代さんが教えてくれた。将来の目標は「自分らしくあり続けること」。「自分らしさ」を形作っていくのも、きっと応援してくれる周りの人との関わりなのだろう。

名前の「うるる」の由来は、オーストラリア大陸中央部にそびえる世界遺産の一枚岩「エアーズロック」の先住民族の呼び名から。鈴木選手は壮麗な「ウルル」のように、どんなフィールドでも輝き続けるに違いない。

コロナ禍で交換留学を断念：
サーフィンが私を救ってくれた



波と呼吸を合わせる—©Toshizou▲

大学1年生の頃は多摩キャンパスと練習場所の海との往復に時間がかかり、練習頻度が減ったが、コロナ禍に伴うオンライン授業への切り替えで、練習頻度を確保できるようになり、実力を蓄えていった。

しかし、中大入学前から楽しみにしていた米国への交換留学をコロナ禍で断念せざるを得なくなったことはショックだったという。自然相手の屋外競技であり、屋内競技ほどはコロナの影響はなかった。「サーフィンが当時の私のメンタルを救ってくれた」と振り返っている。

いまにも崩れそうな波の最高点で、サーフボードを素早くターンする高難度の「オフザリップ」など、大会で技が決まったときが一番の喜びという。

高難度の技
「オフザリップ」が決まる喜び

「児童ののみ込みの早さに驚き」

「先生

八王子市立由木東小で 「学校応援プロジェクト」

中大生12人がパソコン操作を小学1年生に手ほどき

中央大学の学生が2022年6月24日、多摩キャンパスからほど近い八王子市立由木東小^{ゆぎひがし}学校（源田佐知子校長）で、1年生にパソコンを教える「出張授業」を担当しました。初めてパソコンに触れる児童もいて、「私もできた!」「パソコンって楽しい」といった感想が聞かれました。

子供たちに、デジタル社会の“入り口”で機器や操作に慣れ親しんでもらうのが目的の一つです。教職課程の履修者を中心とする学生12人が、4クラス140人の児童に学習端末「Chrome Book」の基本操作や取り扱い方などを手ほどきしました。



って大変だ！」

▲児童にパソコン操作を教える学生たち
＝八王子市立由木東小

「ログイン」「パスワード」 ってなんだろう？

学生たちによる授業は、「学校応援プロジェクト」として2019年からスタートしました。教職課程を履修する学生を中心に、大学での日々の学びを「他者に伝える・教える」力を身につけるとともに、活動を通じて地域に貢献することも大きな目的です。

パソコンについて詳しく知らない子供たちに取り扱いを教えるには、「ログイン」「パスワード」「シャットダウン」といった、使い慣れた大人なら知っているはずの用語の説明から始めなければなりません。パスワードはさしずめ、「パソコンを開く魔法のおまじない」といったところでしょうか。

「***ー**」。教室の黒板にログインの際のパスワードが書かれています。数字(この記事では伏せてあります)の間にある「ー」は、分かりやすいように、キーボードのひらがなのキー「ほ」を押すように指し示してありました。

学生の指導で どんどんトライ

学生たちは、電源の入れ方から始まり、文字の入力方法、画面のスクロールの方法などを分かりやすく教えることに懸命に取り組んでいます。子供たちは、手書きで図や絵を描けるアプリ「ジャムボード」を使って好きな絵を描いたり、「Yahoo! きっず」のゲームを楽しんだり、学生の指導をすぐのみ込んで、どん



アプリの「ジャムボード」を使い、児童たちは思い思いに絵を描いた＝八王子市立由木東小▲



どんトライしていきました。

学生たちは「みんな分かった？ OK?」「できていない人は手を挙げて!」「誰かにいたずらされないように、シャットダウンしてみようか」と、時に大きな声を張り上げながら指導に熱を入れ、休憩を挟んだ90分間(2時限分)の授業はあっという間に終了しました。

「担任教諭の大切さ」 「伝えることの大変さ」 を知る

教職課程を履修し、数学の高校教諭を目指しているという理工学部3年の須藤春輝^{はるき}さんは、「(アプリで)文字を書くだけと伝えても、図形を描くツールを見つけだしたりし

て、子供たちは皆、のみ込みが早い」と驚き、「2つのクラスで教えましたが、担任の先生の個性で(学級それぞれの)子供たちの雰囲気の違いがありました。担任教諭の大切さが分かりました」とも。将来の目標に向けて有意義な経験となった様子でした。

文学部3年の加藤詩菜^{うたな}さんも教



▲「みんな、よく聞いてー!」。
学生たちが児童に呼びかける場面もあった
＝八王子市立由木東小



出張授業を担当した中大学生たち▶

職課程を履修中で、「児童に伝えることの大変さを感じました。(授業前の準備と比べて)想定外のことも多かったのですが、子供の目線に立つことの大切さを学びました」と感想を話していました。

ほかの学生からも「子供たちの元気に圧倒された。でも、やりがいがあった」の声や、「先生って大変なんだなと思った」「1年生は覚えるのが早い。ちょっと教えるとすぐにできるようになる」といった感想が聞かれました。児童たちは「おもしろかった」「(学生たちが)優しく教えてくれた」と喜んでいました。

由木東小の源田校長は「学生の皆さんは分かりやすい言葉で教えてくれています。『お兄さん、お姉さん』として、教員とはまた違った親しみやすさもあります」と語り、学生による指導を歓迎していました。



▲入力やスクロールの仕方など操作法を分かりやすく指導する学生たち

☆学校応援プロジェクト

学校現場のニーズに応える授業プログラムを学生グループが作成し、出張授業などを実施するプロジェクト。大学の教育力を高めることを目的とする大学内の補助金事業「中央大学教育力向上推進事業」のひとつとして2019年4月にスタートした(補助期間は2021年度末で終了)。

事業には、英語でコミュニケーションをとる楽しさを伝える「グローバル教育プロジェクト」、プログラミング教育の効果を研究する教員と学生による小中学校への出張授業などを行う「プログラミング教育プロジェクト」、中学生らが自らの将来やキャリアを考える「キャリア教育プログラム」と、「いじめ防止教育プログラム」がある。

プロジェクト参加の学生は教職課程履修者には限定せず、中大での学修で得た知見を他者に伝え、教える力を身につけることで、地域に貢献することを目指して活動している。

学内のSDGsの取り組みを 「英語CM動画」に



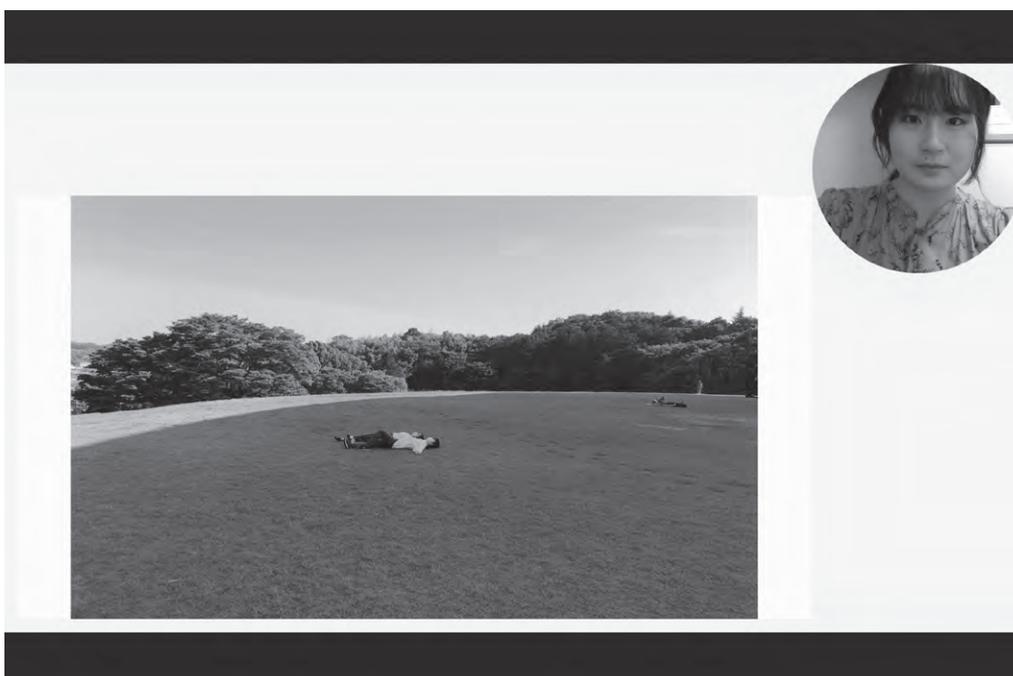
国際経営学部 飯田朝子教授ゼミ

国際経営学部の飯田朝子教授が担当する「入門演習ゼミ」に所属する1年生13人が、「SDGsと広告」をテーマにフィールドワークを実践し、学内のSDGsに関する取り組み調査の結果に基づいた英語のCM動画を制作した。

2022年夏の約1カ月間、ペアやグループの5つのチームごとに多摩キャンパス構内をつぶさに歩き、生協食堂の従業員、モノレール駅からの入構口に立つ警備担当者、清掃業者ら大学運営を支える人々取材。建物内や風景などを映像に記録し、スライドなども織り交ぜて制作した。ナレーションや字幕などはもちろん全て英語。ゼミ生の沼田晴^{はるな}さん、森陽^{はるな}菜さんの2人に、フィールドワークの意義や面白さ、制作上で工夫した点、学んだことなどを尋ねた。

多摩キャンパスの自然の素晴らしさ再認識、
LGBTQの人に配慮したトイレは…

「中大生のココロを健康に保つ 学内施設紹介と今後の課題」



多摩キャンパスのラバースヒルを紹介する沼田晴風さん▲

《And there is a place called Sakura hiroba where Someiyoshino blooms during spring. If you look closer, two people are sitting on the bench. They were playing catch before I took this photo, so I guess it is not only a place to hang out; it is a great place to enjoy nature and do whatever you want that makes you feel happy.》

(訳)そして、春になるとソメイヨ

シノが咲き乱れる「桜広場」という場所があります。よく見ると、ベンチに2人座っています。2人はこの写真を撮る前、キャッチボールをしていました。ただ集まるだけでなく、自然を楽しみながら、自分が楽しいと感じることを何でもできる場所なのだと思います。

沼田晴風さんは、櫻井美咲子さん、高橋奏太さんと3人のチームで英語CM「中大生のココロを健康に保つ学内施設紹介と今後の課題」(9分49秒)を制作した。一人ひとり

の学生が過ごしやすいキャンパスであるために学生相談室やダイバーシティセンターが担っている役割、そこで働く人々の声のほか、心地よくリラックスできる空間、場所として「桜広場」「ラバースヒル」などを紹介した。

LGBTQについては、構内のほぼ全てのトイレを見て回り、男女別の施設が大半だった現状から、マイノリティ性のある学生らへの配慮としての課題を提起している。

「テーマの『SDGsと広告』にはどういう関連があるのだろうか」と不思議

議に思い、飯田ゼミを志望したという沼田さんは、「世界の課題は複雑で、一人では解決できない。(広告として)何かを人に伝える、訴える上で、その中にSDGsが深く関わるということに学びを通して気づいた」と説明する。

宮城・仙台出身で、小学生のとき

に被災した東日本大震災で心の傷の癒えない人々を見て、心の拠り所や居場所が守られていることの大切さを知った。さらに高校時代に留学したカナダの先住民族の同級生から迫害の歴史を知らされたことが、「ココロを健康に保つ」という題材を選定したことに影響した。

取材や制作の経験から、「広告や動画で何かを伝える、訴える難しさを感じた。相手の立場に立って物事を考えてみるのが大事で、それが一人ひとりの尊厳が守られる世界の実現に寄与する。どうアプローチできるかを今後も探っていきたい」と話している。

実はモノレール口に立つ警備の方が重要な役割 「多摩キャンパスの フードロス削減大作戦」



学食の券売機のスライド。森陽菜さんたちは学内のフードロスについて調査した▲

「中大は学食の規模も大きく、初めはさまざまな課題が見つかるのではないかと考えて取材しました」と、フードロスの問題を取り上げた理由を話した森陽菜さん。佐久間佳乃さんとのペアで、英語CM「多摩キャンパスのフードロス削減大作戦」(9分27秒)を制作した。

《Now, here is a question. How much food loss is generated per day at Chuo University?

- 1: 10 to 50 servings,
 - 2: 100 to 150 meals,
 - 3: 300 or more meals
- I'll give you five seconds

to think about it. The correct answer is 1: 10 to 50 meals. Many people are surprised at the surprising low number.》

(訳)さて、ここで質問です。中央大学では、1日にどれくらいのフードロスが発生しているのでしょうか。

1:10食～50食、2:100食～150食、3:300食以上

5秒で考えてみてください。正解は、1の10～50食です。意外と低い数字に驚かれる方も多いのではないのでしょうか。

英語CMでは、フードロスの定義を「売れ残り、食べ残し、賞味期限切れなどで、食べられたはずの食品を廃棄すること」と紹介。学食の担当者取材して、モノレール駅からの入構口に立つ警備の方がフードロス削減に重要な役割を果たしている

ことを明らかにした。

入構する学生数を朝から集計機を使ってカウントしていた警備の担当者が、午前11時に大学の総務課に連絡した数をもとに、学食を管理する担当者が「先週より多いか少ないか」などを判断して必要な食事の数を割り出す。それでも売れ残ったりする弁当は値引き販売したり、飼料や肥料として再利用したりする対象となることが取材を通して分かり、英語CMに反映した。

学食規模が大きいため、何百食ものフードロスが生じているのではな

いかと想像していたが、ほとんどなかったことに森さんは最も驚いた。英語CMにはスライド26枚を用意して、「英語が理解できなくても、画面(映像)だけで伝わる内容になるよう意識して作った」という。

さらに「調べたことを視覚的にも言葉としても分かりやすく、シンプルに伝えることの大切さを知った。実際にキャンパスを歩いて調べたこと自体が楽しかった。記憶に残る経験になりました」と教えてくれた。



沼田さんのチーム、森さんのチームの題材のほか、ゼミ生は「4連ゴミ箱より2連ゴミ箱が多いのはSDGsに良いからだと知っていましたか?」「多摩キャンパスのソーラーパネル設置とエネルギーセンターの意外な事実」「駅から5号館まで歩くと階段は何段? バリアフリー問題から考える多摩キャンパスの動線」のタイトルで英語CM動画を制作した。



英語CMを制作した飯田朝子教授のゼミのメンバー▲
(中央は飯田教授)

☆入門演習「SDGsと広告」 飯田朝子教授

国際経営学部の1年生が入学して最初に履修するゼミが「入門演習」です。多くのゼミ生は高校時代にSDGsについて学んだ経験があり、かつ広告にも興味があるため、2022年度はSDGsをテーマとした英語のCMを作成することにしました。

まだ馴染みの薄い多摩キャンパスのウォーキングツアーを企画し、自身の足で歩くことで大学やその歴史に親しみ、同時に学内の良い点や問題点に目を向ける機会がありました。そこからSDGsを考えるきっかけを見出し、丁寧な取材を通して映像による成果物を完成できたことは、彼らの大きな自信になりました。

英語で作成したCMは、世界に向けて発信することも可能です。これからも中央大学のSDGsの取り組みに寄り添い、学生の視点から良さをグローバルに発信できればと思います。

